

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成27年9月25日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局・研究科 医学研究科

職 名・学 年 教務補佐員

氏 名 嶺 本 和 沙

助成の種類	平成27年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	視知覚に関する欧州会議 European Conference on Visual Perception		
発表題目	Intensity of the facial expressions influences the aftereffect of facial expressions		
開催場所	英国・マージーサイド州・リヴァプール・リヴァプール大学		
渡航期間	平成27年8月22日 ～ 平成27年8月29日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	350,000円	
	使用した助成金額	350,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	学会参加費	35,204円
		移動費(航空運賃を含む)	223,340円
宿泊費		73,962円	
日当の一部として		17,494円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。 このたびは採択して頂き、ありがとうございました。国際学会は、最新の研究を知ることができること、多くの研究者と交流することができることから、研究者として積極的に参加していきたいと考えております。しかし、旅費が高額になるため私費での参加は難しく、このような機会を頂けたことを感謝いたします。今回、私費の負担がありましたが、それほど大きな負担とはならない金額で収まったことも、大変ありがたかったです。		

平成 27 年度 国際研究集会発表助成 (II 期)

成果の概要

医学研究科 教務補佐員 嶺本和沙

1. 参加学会の概要

研究集会名: European Conference on Visual Perception (ECVP)

開催場所: リヴァプール大学 (英国)

開催期間: 平成 27 年 8 月 23 日～平成 27 年 8 月 27 日

今回報告者が参加した European Conference on Visual Perception (ECVP) は、視知覚研究を中心として 1978 年より毎年ヨーロッパの各地で開催されている。参加者はヨーロッパだけでなく、アメリカ、アジアからの参加も多く、この分野において最大の国際学会の一つとなっている。また、例年日本からも多くの研究者が参加している。近年では、顔に関する研究が多く発表されており、今年度も顔の認知・知覚に関するセッションが、口頭発表とポスター発表の両方において設定されていた。

2. 発表の概要

報告者は、The human face (detection, discrimination & emotion) というポスターセッションにおいて、「Intensity of the facial expressions influences the aftereffect of facial expressions (表情の表出強度が表情の順応効果に与える影響)」との演題名で、8 月 24 日にポスター発表を行った。発表内容は下記の通りである。

これまで多くの先行研究によって、ある情動表情 (順応刺激) を見続けると、その後に見る同じカテゴリの表情 (テスト刺激) がわかりづらくなる「表情に対する順応効果」が報告されている。表情に対する順応効果は、順応後に提示される表情の認知を変容させる現象であるため、この効果に影響する視覚情報を調べることで、表情の認知過程の特性を明らかにできると考えられる。

本研究では、順応刺激に表出強度が異なる 3 種類の用いることで、表出強度が順応効果に与える影響を段階的に検討した。刺激として、怒り・恐怖・喜び・悲しみの表情を使用し、表出強度は中性表情との合成により操作した。テスト刺激には天井効果を避けるために表出強度の弱い表情を使用した。順応刺激のうち最も表出強度の弱い条件では、テスト刺激の表出強度と心理的に同程度の刺激を使用した。参加者はテスト刺激が何の表情に見えるかを回答し、正答率を順応の強さの指標とした (順応が強くなるほど正答率が低くなる)。さらに、順応刺激とテスト刺激の人物が同じ条件の実験 1 と、異なる条件の実験 2 の 2 つの実験を行い、表情に対する順応が、異なる人物の表情に対しても影響を与えるかについても検討した。

順応刺激が強くなるほど、順応効果への影響が大きくなるという結果が得られたことから、表情の認知には、表情の強度 (中性表情からの距離) が重要であることが示された。この傾向は、すべての表情カテゴリにおいて同様であった。また、順応刺激とテスト刺激が心理的に同程度の強度の条件でも、テスト刺激の表情認知が困難になる結果となったことから、テスト刺激の認

知が困難になるのは、表出強度の強い順応刺激と弱いテスト刺激を比較したことによる反応バイアスによるものではなく、順応という現象の結果であることが示された。さらに、表情に対する順応は実験1と実験2に共通して見られ、順応刺激の表出強度に応じてその強度は変化した。この結果は、表情と人物の認知過程が独立して行われていることを示唆するものである。

3. 報告者の研究発表に関する成果

本学会でのポスター発表を通じ、各国の参加者と有意義な議論を行うことが出来た。順応という現象は、元々顔や表情のような複雑な視覚刺激に比べて、より単純な色や形といった視覚刺激の研究分野において活発に使用されてきた。本学会は、顔以外の視覚刺激の研究者も多く参加していたことから、普段交流することの少ない分野の研究者からコメントをいただくことも出来た。本研究は、論文投稿準備中であったが、この学会でいただいたコメントを参考に、修正した部分も多くある。

本学会で発表した研究のアブストラクトは、後日雑誌「Perception」に掲載され、無料でオンラインによるアクセスが可能になる。そのため、本学会に参加できなかった研究者にも、本研究の成果を発信することができる。

4. 報告者の研究発表以外の成果

本学会では顔や表情の研究者も多く参加しており、最新の研究結果に触れたり、研究者と交流したりすることもできた。研究発表では、今後の研究の参考になる実験方法や、研究結果を知ることができた。また、同じ分野の研究者と直接ディスカッションできたことで、大いに刺激を得ることが出来た。

謝辞

最後になりましたが、国際研究集会への参加および発表を行い、多くの研究者との交流・情報交換をする貴重な機会を与えていただきました、京都大学教育研究振興財団の関係者各位に心より御礼申し上げます。